

実務家の我々が、『論語』を日常業務に活かすには。

生涯に五百を超す企業の設立に寄与し、「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一は、生涯『論語』を判断基準とし、過たず人生を全うできたと述べています。

二千四百年前の、古典の中の古典『論語』の、どこに、その魅力・その真理が隠されているのでしょうか。

実務家の我々が、実践に活かすべき読み方を、二、三紹介しましょう。

“子曰く、朝(あした)に道を聞かば、夕(ゆうべ)に死すとも可なり” 里仁第四

朝に、道(真理・人としての正しい道・天命)を聞いたら、夕方に死んでも良い。これでは、学者の解説です。実務家の我々には、ピンと来ないのです。

社長として、経営理念(天命)を実現するために、この命を捧げること！

命より大事なものがある事を知り、百尺竿頭一步を進められること！を、肚の深い所で納得しているかどうかを問うているのです。

逆に言うと、大半の社長は「道を知らない」ままその日を無為に過ごしているから、その行動にも、発言にも何の迫力も重みもないというのです。

“性相近し、習い相遠し” 陽貨第十七

これも有名な一節ですが、一般的な解説では、生まれながらの性質は似通っているが、それ以降の躰や努力で差が出る、と。これでは、せいぜい百点満点の五十点です。

大事なことは、部下を叱る時、性(生まれつき)を見て叱るのか、習い(後天的)を見て叱るのかという点の違いです。叱られる側に立てば、解ります。成長させようと願って、叱ってくれているのか、怒りに任せて怒っているのか。

“子夏曰く、小人の過つや、必ず文(かざ)る” 子張第十九

解説書には、小人が過ちをすると、言い訳をして、ごまかそうとすると、あります。

確かに、部下の中で、失敗をした時に、言い訳をして反省をしない者がいます。

言い訳をして、ごまかして終われば、次は、取り返しのつかない大きな失敗に繋がる危険があります。しっかりと反省し、失敗を次の成功に活かす事が大事なのです。

もともと、「失敗は許せ、嘘は許すな」が、前提であることは言うまでもありません。

経営は、人間が相手です。人生の悩みの大半が人間関係にあります。

「賢者は歴史に学び、愚者は体験に学ぶ」(ビスマルク)と言います。

社長、沢山の本を浅く読むのは辞めて、『論語』に的を絞り、深く深く読み込んで、切れれば血の出るような、生き生きとした学びを、一緒にして参りましょう。



今月のポイント

「論語読みの論語知らず」に

ならないことです。